

保育者論

—共生へのまなざし—

岸井勇雄・無藤 隆・湯川秀樹
[監修]

榎沢良彦・上垣内伸子
[編著]

浜口順子・矢萩恭子・山田陽子・鈴木眞廣・若松亜希子
向山陽子・義永睦子・鈴木正敏・福元真由美
[著]

第四版

同文書院

見本

第四版改訂にあたって

2017（平成 29）年 3 月に「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が改訂（改定）され、2018（平成 30）年 4 月より施行されました。さらに、保育士養成課程も見直され、2019（平成 31）年 4 月より改正された新しいカリキュラムが実施されています。各保育者養成校（施設）においては、これらの改訂（改定）・改正を踏まえて、社会で求められている資質を身につけた保育者の養成に努める必要があります。それにこたえるべく、本書を改訂することになりました。

本書の改訂に当たっては、初学者である皆さんが保育者であることの意義・責任、保育者として生きていくことの意味を自ら深く考え、理解し、保育者の仕事に興味をもって学習できるように内容を再吟味しました。その結果、特に以下の 5 点について留意しました。

第 1 に、学生の皆さんの理解をより容易にするために、事例の解説を簡略化したり、図表で表現できる箇所はできるだけ図表化するなど、読みやすさと見やすさの向上を図りました。

第 2 に、本書のコンセプトである「共生へのまなざし」がグローバル化の進む社会においてますます重要となることを踏まえ、多様性の問題として、外国籍の家庭や障がいのある子ども、配慮が必要な家庭、児童虐待の家庭などへの支援について内容の充実を図りました。

第 3 に、新しい「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」において、より重視されるようになった「乳幼児期から学童期への学び・発達の連続性」「保育者同士の連携・協同」「保育者の専門性の向上」などについて内容の充実を図りました。

第 4 に、調査データに関しては最新のものに更新しました。

第 5 に、各章に関連のある新たな法令や改正された法令について確認し、必要なかぎり内容に反映させました。

各執筆者は以上の点について内容を丁寧に見直し、修正しました。

子どもの成長・発達にかかわる問題・課題が山積する現在において、幼児期の教育・保育の重要性はますます高まりつつあります。それゆえ、保育者はすべての子どもが人権を保障され、健やかに成長できるように最善の努力をしなければなりません。そのためには、保育者自身が常に学び成長していかなければなりません。幼稚園教員免許や保育士資格を取得することはその出発点に過ぎません。私たち執筆者は、学生の皆さんが本書を通してそのことに気づき、免許・資格を取得することの責任を自覚し、主体的に学び続ける保育者になれることを期待し、本書の改訂に努めました。授業においてだけでなく、これからのキャリアにおいて本書が皆さんの座右の書となることを切に願います。

2020 年 4 月

編著者 榎沢 良彦
上垣内伸子

Contents

目次

はじめに v

第四版刊行にあたって vi

第 1 章 保育者をめざす 1

1. 願望から志望へ 1
2. 子どもとかかわり、自分を知る 4
3. 仲間と語りあう 10
4. 保育から教育・福祉分野を見通す 13

第 2 章 保育するとは 15

1. 保育者からみた「保育する」ということ 15
2. 保育者としての自己成長感 26
3. 保育と保育者に関する定義、関連法令 30

第 3 章 子どもと生きる保育者の生活 39

1. 子どもとともに 39
2. 生活の場をつくる — 環境構成 — 41
3. 子どもとかかわる 47
4. いまをつなぐ 55
5. 成長を支える 58
6. ふり返って考える — 省察 — 61
7. 日々の生活を積み重ねる 67
8. 子どもの育ちを伝える 69

第4章 子どもがみずから成長する力を支える保育者 75

1. 地域における保護者支援・家庭支援の必要性 75
2. 諸施設で働く保育者 80
3. 専門機関間の協力 92
4. 専門職としての保育者の責任と義務 97

第5章 子どもを育てるものの共同性 103

1. 「共同」から「協働」へ 103
2. 子育ての共同体の考え方 105
3. 保育にかかわる保育者同士の「共同」 107
4. 園と保護者や地域社会との「共同」 113
5. 地域における自治体や関係機関等との連携・協働 123
6. さまざまな施設での子育て支援にかかわる「共同」 125

第6章 保育者としての成長 137

1. 子どもにとって嬉しい保育者 138
2. 自分の保育をふり返り、ひらく 139
3. 同僚と共に、学び続ける 145
4. 子どもたちに、保護者に、地域に育てられる保育者 156
5. 人として魅力ある保育者に 164

第7章 現代社会の課題と保育者 169

1. 現代の保護者の課題と向きあう 169
2. 虐待問題と保育者 185
3. これからの保育者の役割 195

第8章 さまざまな国における保育者 –世界の保育について考える– 201

1. 世界における保育をめぐる課題 201
2. 各国の保育と保育者のあり方 203
3. 日本の保育とは 211
4. 文化の上に立つ保育 215

第9章 保育者のこれまでをふり返る 219

1. 幼稚園の設立と発展に力を尽くした保育者たち 219
2. 保育施設の設立と発展に力を尽くした保育者たち 226
3. 子どもの問題に、保育者はどう向きあってきたか 233

第10章 これからの保育を担う –21世紀の保育課題– 243

1. さまざまな人との共生 243
2. 自然環境との共生 247
3. 文化の創造 251
4. 平和の創造 253
5. 保育者像の形成 257

おわりに 261

索引 262



本書について

- ・このテキスト内の事例に登場する人びとは、すべて実際の事例を反映させました架空の人物としておりますこと、ご了承ください。
- ・各章の演習問題は、問題の内容によって、節内、章末、事例に基づいたものなど、さまざまな形式にて出てきます。「自分だったら」とイメージしながら取り組んでいただけましたら幸いです。
- ・このテキスト内で記されている「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」および各「解説」の該当ページは、文部科学省、厚生労働省、内閣府のホームページに掲載されている原本のページに準拠しています。

2. 子どもとかかわり、自分を知る

保育者になろうと決心して、養成課程に一步踏み込むと、保育・教育・心理・福祉・表現などのいろいろな授業があり、それまで抱いていた保育者や子どもに対するイメージが変わってくるだろう。授業を通して得る、新しい知識や技能によって、ますます「保育者になりたい」と考えるようになるかもしれないし、その逆のこともあるだろう。いずれにしても、そのようなときに、こころしておくべきことは、子どもと実際に会える機会を意識してつくるということだ。テレビやビデオもいいが、電車やバス、公園や店先などで見かける実際の子どもの出会いを大切にしてほしい。子どもだけに注目するのではなく、まわりのおとなとのやり取りなども含めて日常的に観察しておくことが、授業で得た知識に奥行きを与える*。学校で準備される実習だけが実習ではなく、日ごろから、いろいろな場面における子どもの姿を意識的に見ておくことは、知識や理屈で硬くなった子ども像に生氣を吹き込んでくれるだろう。

1 はじめての参加実習で

1年生の学生がはじめて、「子どもの心にふれよう」という目的で入った幼稚園実習の記録を、まず紹介する（記録中の下線は筆者が引いたものである）。

【学生Aのはじめての実習】

今回が子どもたちとふれあう最初の実習です。ここの幼稚園は、遊びを中心としているので、登園してきた園児は着替えを済ませ、朝から元気に遊んでいました。山の上で遊んでいるつくし組の子に「おはようございます」と声をかけると返事が返ってきて、照れずにきちんとあいさつができるのだなあと感心しました。あいさつは大切なコミュニケーションの手段だと思います。そして私が「きょうはつくし組でお勉強するんだよ。よろしくね」と言うと、子どもたちは「ワーイ！」とよろこんでくれたので、とても嬉しかったです。(略)

今日は給食の日で、ハンバーグ、スパゲッティ、パン、イカリング、さくらんぼといったメニューで、先生は園児たちに「今日はイタリアンレストランに来たつもりで召し上がりましょう」とおっしゃっていて、園児がよろこびそうな状況づくりがうまいなあと思いました。(略)

先生とのミーティングでは、言葉遣いや話す速さを指摘され、あせると早口になり、同じ言葉を2度くり返す傾向があるようでした。やはり話し方ひとつで子どものとらえ方は違うだろうし、ゆっくり話すほうが、子ど

*幼児に限定せず、小学・中学生を含めた子どもの集まる場所（公園、児童館、図書館の児童書コーナー、玩具店、遊園地など）に折にふれて行ってみるのもおもしろいし、子どもの間で流行している遊びやおもちゃ、ことば、グッズ、ゲーム、キャラクター、テレビ番組などへもアンテナを張っておくとよいだろう。

もにとって安心できるのだらうと思いました。

「子どもの心にふれよう」という目的で行った実習だったが、最初の実習ということもあり、なかなか目的に達することはむずかしく、つい外面的なこと（挨拶ができる、先生の動きなど）に気をとられてしまいがちであったようだ。また、幼稚園独特の小さい机やイス、壁面構成の工夫、遊具の配置など、物的な環境に目をうばわれ、とかく先生のことばかけの「うまさ」に「感心」してしまう傾向がある。この学生Aの記録に、具体的な子どもの名前が出てこないというのもその表れだろう。しかし慣れてくると、しだいに目に見える事柄の背後にある意図や思いに関心が向かっていくものと思われる。

学生Aの場合、先生に早口を指摘されたことは、貴重な経験だった。子どもの前で変わった自分、それに気づかない自分への気づきが、その後の実習において重要な意味をもつ。

【学生Bのはじめての実習】年少クラス

R子と砂場で遊びました。R子は型に砂を入れてたこ焼きをつくっていました。それにはちゃんとしたつくり方があって、「レンジで温めてから粉をかけるんだよ」と教えてくれました。でも、そこにS君が来て「僕もたこ焼きつくる」と言って取りあげてしまいました。私は「S君、だめだよ。R子ちゃんが先に使っていたんだから。順番で使おうね」といっても返してくれなくて、R子は泣き出してしまいました。すぐにY先生がとんできて、S男に「これはR子ちゃんが使っていたんだよ。S君だって自分のものを取られたらいやだよ」と言いました。でもS男は怒ってほかのところへ行っていました。そのままR子と私はまた一緒に遊びはじめただけで、ここはすっきりしませんでした。そして、しばらくするとR子は「これ、S君に貸してあげる」と言って、S男のところへ走っていきました。S男はもういいよ、とすねていたけれど、最後には「ごめんね」と言って仲良く遊びはじめたのです。自分たちだけで、ちゃんと解決できてすごいと思いました。

ミーティングのときに、Y先生が「みんなわがままに見えるけど、何をすることもちゃんと理由があることなんですよ。たまの実習ではなかなか見えにくいでしょうけど、がんばってください」と励ましていただきました。今日1日見た限り、S男の行動は自分が中心で、ほかのお友だちを寄せつけなくて、それを見て、私はおろおろするばかりでした。でも、その行動の1つひとつにきつ理由があったのだと思います。次の実習では、

表2-3 ともみ先生の1年目の日案

N 幼稚園		たんぼ組 (4歳児)		在籍数 男児11名 女児11名 計22名	
期日	5月21日 (火)	天気 晴れ	主な ねらい	自分の好きな遊びを見つけて楽しむ。	
時間の流れ	幼児の主な活動 (予想される活動)		指導上の留意点 (環境・かかわり)		
9:00～	順次登園 ・挨拶をする ・持ち物の始末をする (カバン, 帽子, 園服, タオル) 好きな遊びをする ・井型ブロックで鉄砲を作ってごっこ遊び ・粘土, お絵かき ・ままごと ・砂場 ・色水づくり ・泥だんごづくり ・鉄棒, うんてい		健康かどうか, 何か変わりはないかななどをみながら笑顔で明るく声をかけ, 気持ちの良い1日のはじまりになるようにする。 朝の身支度では, その子にあわせて言葉かけをしたり, 一緒にやってみる。 用意が遅い子どもには, がんばるよう励ます。 保育室や戸外では, 全体が見える位置にいるよう心がけ, 何かあったときにはすぐかかわれるようにする。 戸外では, 固定遊具の遊び方に危険性はないか, 気をつける。危険な遊び方をしているときは, その場で話していく。 水を使うことが多くなってきているので, 袖をまくるように伝えたり, 「お水を大切に使ってね」と言葉かけをしていく。 近くで見ている子には「一緒にやってみる?」と言葉かけをしていく。 むずかしいところは手伝ったり自分でできたところや頑張ったところをほめて, 満足感を味わえるようにする。		
11:30	片づけをする ・片づけ ・手洗い, うがい ・トイレ		お弁当の時間がきたことを知らせ, 活動を切りあげ, 遊びに使用したものを片付けさせる。 片付けている姿をほめる。 手を洗い必ずトイレに行くように伝え, 昼食の準備をするよう声をかける。		
12:00	昼食		全員にお弁当が行き渡ったかを確認する。 食べることが遅い子, こぼす子, 遊び食いをする子には, ほめたり認めたりしながら食べることを促す。 食べ終わった後には, 静かに活動し友だちが食べ終わるのを待つように促す。		
13:30	帰りの会 ・帰りの身支度をする ・カバンを持ちイスに座る ・歌と手遊び ・絵本		片づけをした後, 口をゆすぎトイレをすませ, 帰りの用意をするように伝える。 帰りの準備が遅れている子どもにはがんばるよう励ます。		
14:00	順次降園		元気にさようならのあいさつをする。		
評価・反省 (出席 22名 欠席 0名) ・その子その子にあった言葉かけがむずかしく, もっと積極的にかかわってその子にあった言葉かけや援助をしていきたいと思う。 ・ひとつの遊びにかかわり過ぎてしまい, ほかの遊びがみえなくなっていたので, 危険な場所に保育者がいないときには気をつけて見ていきたいと思う。 ・帰りの身支度では時間がかかってしまいあわててしまうことがあるので, 自分も時間にゆとりをもちゆっくりとかかわっていきたい。					
ともみ先生と主任との話し合いの記録 ともみ先生: 今とはずいぶん違うのに自分でもびっくり。きちんと何かをさせることばかりに目が向いていたような…。 主任: 先生になったという張り切った気持ちが感じられるわね。ちょっと目線が高いかな? ともみ先生: 励ます, ほめる, 促すなど, 精一杯先生らしく頑張っているけど, ちょっと堅苦しい。遊んでいる子どもに対してどうかかわるかが出てこない。楽しんで保育する余裕などなくて, やらなくてはいけないことをやらせることに懸命になっていた。					

表2-4 ともみ先生の5年目の日案

N 幼稚園		すみれ組 (4歳児)		在籍数 男児15名 女児12名 計27名	
期日	5月17日 (水)	天気 晴れ	主な ねらい	友だちの遊びを見たり一緒に遊ぶことで, 友だちとの遊びの楽しさを味わう。	
時間の流れ	幼児の主な活動 (予想される活動)		指導上の留意点 (環境・かかわり)		
9:00～	登園 自由遊び ・ラーメン屋, ジュース屋など, お店屋さんごっこ ・料理ごっこ ・ヒーローごっこ ・色水作り ・砂場 ダム作り ・昆虫ごっこ ・虫探し		昨日欠席だったあいきくとくにあいきくんが登園したら, 体の具合いを保護者に尋ねようすをみていく。 ゆきちゃんは発想がユニークで楽しく, お店屋さんの食べ物作りなども地味ながらじっくりと取り組んでいる。そんなよさを他の子にさりげなく伝えていきたい。大げさにすると逆効果かも。 あき子ちゃんとし子ちゃんは少しずつ周りの子との交流も出てきている。せっかく2人で始めたことなので大切にしたい気持ちと, 自然にほかの子ともつながってくれたらという願いがある。かかわりのタイミングがむずかしい。 だいすけくん, みきおくんは, 自分のアイデアがあるために, 主張するあまり手が出てしまうことがある。いいところは認め, 戦いでやりすぎたり, お皿をグチャグチャにすることで楽しんでいるような場面では違う楽しみも味わえるように。 それぞれの発想を大切にしよう。先を急がずそれぞれの思いが活かせるように。子どもたちと相談しながらテラスにテーブルを広げていこう。 汚れないような身支度の配慮をする。 保育者もなりきって遊びたい。 保育室のてんとう虫のさなぎが成虫になりそうなので, そのことでじんくんと話せたらと思う。		
11:40	片づけ		自分たちが使ったカップ, 砂場道具やボールなど, 洗って拭いて棚にしまうところまでやれるように, 一緒に確認しながら片づけよう。		
12:15	昼食		食事は楽しい雰囲気の中でできるよう心掛けていく。		
13:30	帰りの会		オタマジャクシがカエルに変身しつつあること, テントウムシの羽化など, 生き物の変化成長について投げかけてみたい。		
14:00	降園				
評価のポイント ・それぞれの子どもが遊びのなかで発揮しているその子らしさを周りの友だちに伝えることができたか。 ・トラブルに対しては, お互いの主張を十分に引き出す対応や, 周りの子どもたちのようすや思いに気づくような援助を行っていたか。					
ともみ先生と主任との話し合いの記録 ともみ先生: 幼稚園で気持ちよく1日を過ごすために毎日やることに関して心を砕くことは当たり前のことなので, そういった毎日の援助のことよりも今日このことを大事にかかわろうということ意識している。ところが1年目の日案には子どもの名前が出てこないことは驚き。今は, ○ちゃんが, △ちゃんがと, 1人ひとりの今日の生活を思い浮かべながら明日の保育を考えるのが楽しくて仕方がない。 主任: 日案からもあなたの温かさや楽しさが伝わってくるけれど, 実際の保育もクラスの子どもたちも楽しんでるなど感じられるわよ。					

演習問題

実習先で、指導保育者から、保育者としての位置や姿勢について
Q 注意・助言を受けた場面を具体的に出しあい、その理由を考えてみよう。

(5) 自分へ問いかけながら、くり返される瞬時の判断

瞬時の判断が、いつでも迷いなくできるとは限らない。また、迷いがまったくないとしたら、それもまた考えものである。保育者は、状況に応じて自分なりの判断で動いていかななくてはならないが、どんな判断が考えられるかの選択肢は、一つではない。たとえば、これとって自分の遊びがみつからない子どもに対して、それとなくその子の好きな話題で話しかけてみようか、その子が興味をもって見ている友だちの遊びに誘いかけてみようか、さりげなく製作の材料が目に入るように置いてみようか、ほかの子どもが困っているから手伝ってあげてと頼んでみようか、天気がいいから一緒かけっこしようかと園庭に連れ出してみようか、もうしばらく我慢してようすを見続けてみようかなど、保育者は子どもたちとの無数の応答をくり返しながらか自分自身に問いかけ、実際にどうかかわるかの判断も無数にくり返し行っているのである。

保育の状況は生きて動いているので、なかにはためらいを感じながらも、ある判断を選ぶ場合があり、選んだ結果、違っていたと感じることもある。では、どうしたらいいか。それは、また考えて、判断して、子どもとの応答をくり返していくことである。保育者は、瞬時に行った判断のその次の状況を自分自身で引き受け、瞬時の判断をさらに、くり返し続けていかなければならないのである。

3 知る・わかる・理解する

(1) 子どもの気持ちを知ろうと自分なりに考える

保育においては、「子どもの気持ちに共感し、子どもの気持ちを受け入れることによって子どもとの信頼関係をつくる」ことが大切だとよくいわれるが、そのための一般的な方法というものはないといってもよいだろう。1点あるとすれば、それは、何をあいても、まず相手の気持ちを知り、考えようとするころの姿勢だろうか。

保育者を志す実習生に、「そのとき、〇〇ちゃんはどんな気持ちだったと思いますか」という質問をすると、黙ってしまう人が意外に多い。本人なりに感じていることはあるらしいのだが、いわゆる「正解」を求められているように思い込

んでしまって、何も言えなくなるようだ。あるいは、いま、感じている思いをどんなことばにして述べればよいのか、ためらっているようでもある。同じようなことは、子どもとのかかわりにもある。

以下は、ある実習生の日誌に書かれていた文章である。

Rくんが、今日のお帰りの時間にロッカーの棚の上のお友だちの作品を壊していたので、「お友だちがせっかくなつくれたのだからやめようね」と言ったのですが、止めてくれずドンドンとこぶしで作品を叩き続けていて困りました。何かを叩くことが楽しいのかなと思ひ「Rくん、今後は先生とパンチの練習をしようか」と言うと、笑ってはくれるのですが、まだドンドン叩いていました。いけないことはいけないと、もっと強く注意すればよかったのかもしれないと思ひました。

このように考えた実習生は、翌日、男児Rが「お花見」といって女児Kが並べていたままごとのごちそうをひっくり返してしまう場面に遭遇する。泣いてしまったKを見て、今度は、決然と注意するが、Rはその場を蹴散らしてどこかへ行ってしまった。この日の反省会で保育者は、実習生とRのこの日の出来事や、これまでの行動を基に、Rの気持ちについて自分の知っていることや、分からないでいることも含めて話しあった。

(2) わかることもあればわからないこともある

毎日の保育においては、(1)のRのように理解しがたいと思える子どもの行動に出会うことがある。たとえば、「泣く」という行為について、以下の事例をもとに考えてみよう。

事例2 <泣く子ども(その1)>

登園早々、ある子どもがいきなり泣き出した。保育者はいったい何があったのか、どこか痛いのか、だれかに叩かれたのか、悲しいのか、悔しいのか、あれこれ考えて、訳を聞いたり、なだめたり、抱いたり、いろいろと試みた。子どもは泣くばかりで、うまくことばにはできない。そこで、保育者は、脈絡がないように見えた時間の流れを注意深くみつめ直してみた。すると、元気に登園してきたその子どもが、かばんが置いてある自分のロッカーの前で突然泣き出したことを思い出し、「あっ」と思い当たった。その日はお弁当がない水曜日(午前保育の曜日)だった。保育者は、この子どもが、朝の身支度をしようとしたときお弁当が入っていない自分のかばんを見て、急に不安になったのではないかと考え、「きょうは、お弁当がない日だったのね」とゆっくりとくり返し伝えると、その子どもは落ち着くことができた。



▲今日のようなすを保護者に伝え、子どもの成長やさまざまな情報を共有する

そのためには、入園前の十分な説明や見学の手機はもとより、日常的に登園・降園時のちょっとしたタイミングを活用した会話や情報交換、毎日の連絡帳や電話・メモなどによるやり取りなどから、子どもに関して変化した点や、成長していく姿などを共有しあうようにする必要があります。

この日常の保護者との関係づくりは大変重要であり、どの保護者をもおろそかにすることはできない。ひとりの保育者が一度に複数の保護者を相手にするには限界があるため、園全体で取り組んでいくべき重要事項であるといえる。保護者会や保育参観、保育参加、個人面談、クラス懇談会、行事への参加や手伝い、園長との懇談会や育児相談、保護者同士の茶話会などといった機会や、その日の保育について簡潔な文章で伝えるホワイトボード、特定の遊びや活動について写真などで保育のようすを伝える掲示板、またドキュメンテーション^{*}やポートフォリオ^{**}といった方法、園だよりやクラスだよりといった園から家庭へ向けて発信される手紙類、さらには、園のホームページなど、多様な手段や方法を駆使して、園の保育を保護者に伝え、家庭でのようすを知り、保護者とともに協力して子どもの育ちや発達を支援していくことが求められているのである。

そして、このことは同時に、保護者が子育てへの不安や孤独感を解消し、保護者同士が仲間意識をもてることにつながり、また、子どもの気持ちをくみ取りながら子どもとかかわることの大切さやよるこびに気づいていくという点において、保護者の子育てを支援していくことにほかならない。

コラム 6 <後回しにできない保護者への連絡>

決められた時間のなかで、たくさんの職務をこなしていく保育者にとって、お互いに協力しあうことはもちろんのこと、どの仕事を先にするかという優先順位をつねに考えながら仕事をすすめることも必要となります。

そのなかでも、その日の子どもについて必要な家庭への連絡は、後回しにならないように気をつけましょう。とくに、怪我の報告や、その後の子どものようすを確かめる際には、忙しさに紛れてすっかり忘れることがないよう、慎重さが重要です。

^{*}ドキュメンテーション
イタリアのレッジョ・エミリア市における幼児教育実践の方法の一つとして以下のように説明されている。「ドキュメンテーションは、一般的には「ある目的のために収集・蓄積・作成された文書・図形などの総体」を指す言葉ですが、レッジョ・エミリアでは、保育者によって、子どもの言葉・活動の過程・作品などが写真・テープ・ノートなど多様な手段で記録・整理・集約されたものを指しています。」(大宮勇雄「学びの物語の保育実践」ひとなる書房、2010、p.39)(第8章 p.209 参照)

^{**}ポートフォリオ
もともとの意味は「紙ばさみ」「書類入れ」。保育実践においては、個々の子どもの経験や学びのプロセスを写真や文章を用いて可視化した個人の記録を指す。たとえば、ニュージーランドの保育実践現場には、子どもの個人名別ファイルが保育室に並べられ、保護者や子ども自身が手に取れるばかりではなく、記録しあうこともできるようになっている。子どもの成長を、客観的な基準に照らしたチェックリストでみるのではなく、その子の「学びの物語(ラーニングストーリー)」によって、子ども理解を深めながら評価(アセスメント)しようとするものである。

3 関係機関へ伝える

子どもや保護者のさまざまなニーズに応えるためにも、保育者は、園内の閉じた人間関係に留まるのではなく、地域のいろいろな関係諸機関とも積極的に連携・協力し、子どもの姿を伝えていく必要がある^{*}。

たとえば、特別な配慮が必要な子どもや障がいのある子どもについては、精神的な問題や育児不安を抱える保護者や、虐待などの不適切な養育が心配される保護者については、市町村の自治体の相談窓口や教育委員会、病院などの医療機関、治療的なかかわりを行う専門職員がいる療育機関、心理学やカウンセリングの専門的な知識や技能を備えた巡回指導員や発達支援員、地域住民の健康の保持や増進を支えている保健所や保健センター、専門職員による相談・支援事業を行っている児童相談所、地域の児童委員や主任児童委員^{**}、「要保護児童対策地域協議会」を構成するそのほかの専門家などと連携することも有効である。

また、異年齢の子ども同士の交流や体験を行ううえでは、小学校や中学・高等学校、あるいは高齢者施設や障がい児施設などとも関係を築き、相互交流により双方の子どもや児童・生徒などにどのような育ちがみられるかを伝えあうことも必要である。とくに、卒園をひかえた年長児を送り出す際には、就学先の小学校に対して子どもの育ちを長期的な視点から支えていくための資料^{***}を作成し、送ることとなる。

いずれの場合も、保育者個人で取り組む問題ではなく、園としての対応が求められることである。しかし、保育者としては、いざというときに園での子どもや保護者のようすや、園の保育、自分の考えなどを自分たちとは異なる立場の相手に対して伝えていく重要な役割があることを認識しておきたい。

演習問題



Q

自治体のホームページを参照したり、直接行政の窓口へ出かけたリして、自分の居住地域に子どもや子育てにかかわる関係機関としてどのような施設や機関があるか、またそこにどのような専門職員がいるかを具体的に調べてみよう。

4 園の保育を地域へ発信する

最後に、保育者の専門性として、子育て支援の役割が強く求められてきていることを考えなければならない。

子どもを取り巻くさまざまな環境の変化により、保育者は、園に在籍する親子

^{*}「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」においても、園と家庭との連携以外に「心理や保健の専門家」「地域の子育て経験者等」「嘱託医、市町村、保健所等」「市町村又は児童相談所」「嘱託医や子どものかかりつけ医等」「市町村や関係機関」などとの連携・協力が述べられている。

^{**}主任児童委員
児童福祉法により、児童委員は、地域の児童および妊産婦に対する相談・援助等を行い、主任児童委員は、地域全体の児童福祉に関して児童福祉関係機関との連絡調整や、児童委員への支援を担当するとされている。

^{***}第6節の保育の評価の部分であげた「幼稚園幼児指導要録」「保育所児童保育要録」「幼保連携型認定こども園園児指導要録」の抄本または写しがこれにあたる。

察できるかどうかにかかっているとんでも過言ではない。

客観的な記録なら動画撮影の方が優れている。しかし、1人ひとりの子ども・子ども同士・子どもたちとのかかわりである保育を当事者として振り返り、考察することは保育者にしかできない。

今日1日をふり返り、考察しつつ記録し、記録しつつ考察し、やがて、明日の子ども・子ども同士・子どもたちへの想いを膨らませて、明日の保育につなげる省察は、子どもの傍らに在って、共に生活する保育者にしかできない行為である。

図6-1は、保育者になって半年経った10月の、3歳児クラス担任Y先生の記録である。子ども1人ひとりの気持ちを大切にしながら、子ども同士の関係を丁寧に観ていきたいと努めている。その子の今を理解しようと努め、保育者として、子どもとのかかわりを模索している姿が浮かび上がってくる。保育者として、3歳児クラスの10月の子どもの共感者、理解者、支援者としてありたいと懸命な様子が見えてくる。

日々の記録を1ヶ月後、学期末、年度末、修了時と、時間を経て読み返すことで、1人ひとりの子ども・子ども同士・子どもたちの成長を確認できる。保護者へのおたより、指導要録・保育要録の重要な資料になる。何より、自らの保育者としての成長の記録になる。



つぶやき < Y先生と「記録」 >

ここに事例を提供してくれたY先生は、「1年目は、毎日子どもと過ごすことでいっばいで、記録・日案・週案と言われても、子どもとの時間を思い返し、記録するだけで精一杯でした」と当時を振り返る。「園長から日案・週案の様式を渡されましたが書けなかったので、様式にとらわれずに記録を書くことを許可してもらいました。確か、三学期から日案・週案を自分なりの様式を模索しながら書いたような記憶があります。また、記録にも出てくる学年主任のM先生と保育後に話すことで、子どもたちの泣く・すねることの背景にまで思いいたるようになったり、子どもが本当のことを言っているかどうか分からないととらえる自分自身の子どもへの見方の浅さに気づかされたりしました。記録は、私と子どもの成長のエビデンス。記録のおかげで、学期末の保護者への“育ちの報告”や指導要録を記すときに困ったことはありません」と語ってくれた。

3 週案に組み込まれた記録「先週の子どもの姿」と保育者の育ち

記録を保育日誌に位置づけ、形式が保育者に任されている園、園児全員の個人

ノートがあり、かかわった保育者が自由記載する園、保育終了後に園内図の周囲に保育者が集まり、今日の子どもたちの様子を時系列で追い、特筆すべきエピソードを共有しながら記録に残す園など、近年、保育の質の向上に取り組む過程で、園日誌、保育日誌、日案、週案の内容・形式を見直し、整理し、記録方法を再考して、「記録と省察」を勤務時間内に終わられるよう、園務の効率化に取り組む園が増えている。

図6-2は、経験年数6年のS先生の週案の形式である。年長児クラス12月第2週の記録が「先週までの子どもの姿」として週案に組み込まれている。

「先週までの子どもの姿」に、1人ひとりの子ども、子ども同士、子どもたちの姿を記していると、自ずから「今週のねらい」が見えてくる。S先生は、保育

・週案 (12月6日~12月10日) 男児9名・女児2名				
先週までの子どもの姿	冷たいが厳しくなった一週間であったが、太陽が出た日は意欲的に外へ出て遊ぶ人が多かった。アルバムの絵は少数で行ったため、積極的な人を優先して行い、後半は保育者の意図で展開してほしい人に声をかけ、あまりプレッシャーにならないように進めていった。朝は少しも毎日少ずつ、なるべく全員が行うようにした(かなり遅れてはす)。 「k いん」ごっこで男の子がまとまって遊ぶ姿が見られたため、保育者側からもイメージを提示したりしながら遊びを展開していく見守り。点々で行われていた女の子たちのまごっこ(木)に「木」に「木」の大きな家になった。ごんごんに大人数で遊ぶのは久しぶり(初めて?)のようだったが、意見のくいちがいは伝わらなから、少とラガは発生した一週間であった。			
今週のねらい	*自分と向き合う時間を過ごすことで、自分の課題を感じ、乗り越えようとする。 → アルバムの絵、友だち関係 *食に関する活動を通して、食べるまでに至るプロセスを体験したり 収穫物を味わったりして、舌くのことを感じる。			
日	子どもの自発的な遊び	保育者の意図的活動	課外	環境構成・指導上の留意点
6日	◎ クリスマスグッズ作り ◎ 「k いん」ごっこ ◎ ままごと ◎ 保育室	◎ アルバムの絵 ◎ 絵はがし 郵便屋さん ◎ 歌作り: 図書館へ ◎ P ①とアート活動	E	◎ 散歩: 散歩で 慣れているが、この本道 スカートボタの材料を探し スカートボタの材料を扱う カバンを連れ戻す
7日	◎ ホール 大規模木 ◎ 製作: 絵画 ◎ 砂場での山川づくり ◎ 砂まごお料理作り	◎ 散歩: 買物 ◎ P ①とアート活動	A	◎ 絵はがし: お米・お米一粒を 大切に扱う
8日	◎ 木の自然物を 用いての製作 etc...	◎ 野菜スナップ作り		◎ アルバムの絵: 1人の名が向き合える人 またらと一緒の方が頑張れる人 それぞれの場を確保する
9日		◎ スカートボタ作り		◎ ごっこ遊び: イメージの広がり、 仲間のおもちゃを大切に
10日		◎ P ①とアート活動 ◎ 誕生会 9:45~		
金				
特記事項	・ ウルスの風邪(下痢、吐き気)で欠席した人がある。 → うがい、手洗いをしっかりと ・ アルバム表紙の絵 未定成者は かんばる。 → S, J, E, M, M ・ 仲良しグループ内の人間関係、仲良しグループとその周囲の人たちとの関係 → 自己主張の折り合い 調整が必要。 他者の在り方を認める気持ち、思いやる気持ちを大切にしたい ・ 言葉遣い → キツイ言い方、汚い言葉 ecc... 時と場合を考慮されるように。			

図6-2 週案

(3) “得意”を育て、保育に活かしよう

事例4 学生からの質問

学生「ピアノが下手です。保育者にはなれないでしょうか」

私「若いあなたなら、練習すれば上手になれるわよ。養成校からピアノを始めた先輩がいっぱいいるじゃない!!あなたの得意は何？」

学生「楽器ならクラリネットを高校時代に吹いてました」

私「就職試験にあるのなら、ピアノも頑張る。保育者になったら、クラリネットを子どもたちに聞かせてほしいな。ほかには？」

学生「ダンスが好きです」

私「ダンスも続けて!子どものリズムに合わせる素敵な保育者になれるね。子どもたちは、あなたの得意から感化を受けるわよ」

保育者にはそれぞれの“得意”を育ててほしい。走ること、絵本を読むこと、ダンス、生け花、小物づくり、焚き火、料理、掃除などなど、それぞれが自分の“得意”を自覚してほしい。保育者の“得意”は子どもの生活に必ずつながる。おとなたちが自分の“得意”を保育に活かしたい、補いあって園の文化を育てていけたら、1人ひとりが活かしようおとなの姿を子どもたちに見せることができたら、子どもにとって嬉しい園に近づけるのではないだろうか。

4. 子どもたちに、保護者に、地域に育てられる保育者

1 子どもたちに育てられる保育者

保育者の多くは、初めて担任した子どもたちを忘れない。

R先生は、初めて担任した年少児クラスでの12月、膝に乗ってきた3月生まれのSちゃんのお尻の重さと温かさを、今でもその日の冬空の青さとともに思い出すという。「Sちゃんは私の保育の恩人です」と次のエピソードを語ってくれた。

事例1 保育者としての原体験

新任の12月、保育者生活にも慣れた頃、子どもたちへの思いばかりが空回りして焦っていた。隣のクラスが気になって自信を失いそうだった。そんなある日、3月生まれのSちゃんがそっと膝に乗ってきた。その温かさにハッとした。「私は、クラスの何人の子どものお尻の温かさを知っているだろうか。子どもの前にばかり

いて、ことばで子どもたちを動かそうとばかりしていた。子どもにとって嬉しい先生ではなかった。温かい先生ではなかった」

その日から、ゆったりとかまえ、膝に乗ってきたり、背中にもたれかかってくる子どもを受け止めようと努めた。声をかけるよりも子どもの声に答えるように努めた。遊ぶ子どもたちをよく見ようと努めた。そして、今までの自分はいつもクルクルと動いていて、子どもたちの拠り所になれていなかったことに気づいた。

気づいた日から6年経った今でも、R先生は保育に行き詰まったとき、Sちゃんのお尻の温かさを思い出し、床に座って子どもたちを観察し、子どもの傍らに座って、その子と同じことをしてみると。「そうするとね、次に何をすれば良いかがわかるの」素敵な笑顔で話してくれた。

次の事例は、30年間近く子どもたちと過ごして来たY先生が、特別な支援を必要とするTくんの支援員として過ごした頃の、忘れられないひとコマである。このTくんと「わからない」時間が、保育者人生の源であったという。今なら「わからなくても、つながることができなくても、傍らに居続けることができると思う」と、Y先生はいう。今なら、あの頃よりもTくんにとって嬉しいおとなになれるかもしれないという。

事例2 蛇口から勢いよく出る水をじっと見つめるTくん

Y先生は、最近、支援員としてTくと過ごした数十年前の次のような場面をよく思い出す。

Tくんは園に来るとすぐに足洗い場に行き、蛇口をひねる。勢いよく出る水を見つめて過ごす。お腹が空くのか、お弁当のときだけは、部屋に入って食事を摂る。降園時までまた足洗い場で水を見つめて過ごす。Tくんの行動が理解できず、若かったY先生は「何かしなければ…」と、水の勢いを弱めてみたり「Tくん、水が好きなんだね」などとことばをかけてみたり、他の遊びに誘ったりと試みるが、いつもTくんは同じ行動に戻る。Y先生は1日中、Tくんのそば、水道端で過ごすことになる。ことばが出ないTくんは、嫌なときには高い声で意思表示した。

なぜ今、Tくんのこの場面を思い出すのだろうか。年齢を重ねた今なら「何かしなければ」とは思わないだろう。Tくんもあの時は、自分をどうにかしようとするY先生とはかかわりたくはなかったであろう。あの頃は「Tくんがわからない」ことだけが気になっていた。今ならTくんを解らなくても、Tくんとつながることができなくても、傍らに居続けることができるように思う。

あの頃の体験は、Y先生の保育者人生にとってとても大きな出来事で、子どもたちとの生活を続けられる源かもしれないと近頃思う。

演習問題

Q1 ゆうちゃんの母親は、どんな心境で生活し、子育てをしているのだろうか。想像してみよう。

Q2 保育者が、ゆうちゃんの母親と、ゆうちゃんのことについてもっと一緒に話したり考えられたりするためには、どのような方法があるだろうか。

(2) 笑顔が消えたそうちゃん——再婚家庭の事例

事例2-①

そうちゃんは今年に入って笑顔がない。ほかの子どもたちは、登園すると、自分の楽しみにしていた遊びに早速取り掛かるのに、そうちゃんはみんなを遠目に眺めながらすごしている。何かに夢中になることがない。友だちを求めるのでもなく、保育者を求めるのでもない。遊びに誘っても、ちょっとつきあっただけで、ずっと離れていく。

1年前のそうちゃんは、とてもいたずらっ子だった。保育者に始終ついてまわり、甘えた。保育者がしばらく目を離すと、廊下を水浸しにしたり、トイレにおもちゃやトイレットペーパーの塊を投げ入れたりして、「先生、先生」と呼びにくる。先生が大慌てで飛んでくるのを期待してのことだった。それはそれで困ったことだったが、ある意味では子どもらしい、人を求める姿であった。

しかし、このごろのそうちゃんは、騒ぎを起こさなくなって手はかからなくなったが、抜け殻ようになってしまったようだった。何だかここから保育者や友だちを信頼していないようにB先生には感じられた。

演習問題

Q1 そうちゃんは、なぜ、元気がないのだろう。進級、仲間関係、保育者との関係、遊びへの興味、家庭環境など、いろいろな視点から、考えられる理由をいくつもあげてみよう。また、どの理由が主になるものかについて、どうしたら確かめられるのか、考えてみよう。

Q2 B先生は、そうちゃんのどのようなところを、心配をしているのだろうか。また、その心配はどこからくるのだろうか。

事例2-②

ある日、いつものようにお迎えに来たそうちゃんの母親に、B先生は思い切って、「去年のそうちゃんはやんちゃ盛りだったけど、今年のそうちゃんは大きくなったからなのか、おとなしくなりましたね。何だかあまり元気がないように思うのは気のせいかしら。おうちではどうですか」と尋ねてみた。

母親は、顔を曇らせて、話した。

「去年は本当にいつもいたずらばかりして。でも、いまでは、弟をよくかわいがってくれる、いいお兄ちゃんですよ。赤ちゃん返りを心配していたけれど、そんなこともなく。父親は仕事が忙しくてなかなか家にいないんですけど、休みの日を心待ちにして、よく遊んでいます。再婚した2度目の父親とは思えないくらいよくなつていて。でも、確かに家でもあまり元気がないんです。

気がかりなのは、同居している祖父母のことです。夫の両親なのですが、やはり血がつながった孫がかわいいのか、下の子ばかりかわいがるんです。下の子と上のそうちゃんの2人を保育所から連れて帰ると、おじいちゃんもおばあちゃんも下の子を取り囲むように『おかえり、おかえり』と話しかけ、上の子が横で『ただいま』とあいさつしても、返事もしてくれないんです。祖父母と一緒に食卓を囲むと、上の子は緊張して食が進まず、食べたものを戻しそうになることもたびたびで、そんなようすを見ると、余計に祖父母は上の子をかわいく思えないようで……。

それで、このごろは、祖父母とは別々の部屋で過ごすようにしています。上の子には私しかいない、私が守らなきゃと、私も祖父母の一举一動にびりびりしてしまつて。それもこの子に影響しているのかもしれない。何だかだれにもこころを開かなくなってしまったようで、そうちゃんのこころからの笑顔をずっと見ていないような気がします……。経済的なこともあって同居したんですけど、このままではいけない、できれば親子水入らずで暮らしたいと思っています」。

B先生は、「そうなんですか。おかあさんからは、おじいちゃん、おばあちゃんとの態度がとても気にかかるのですね。父方のご両親ですから、いろいろ気を使うことも多いでしょうね。よく話してくださいました」と応じた。

保育・教育ネオシリーズ [9]

保育者論

共生へのまなざし

2004年4月1日 第一版第1刷発行
2010年4月1日 第二版第1刷発行
2014年4月25日 第三版第1刷発行
2020年4月1日 第四版第1刷発行

編著者 榎沢良彦・上垣内伸子
著者 浜口順子・矢萩恭子
山田陽子・鈴木眞廣
若松亜希子・向山陽子
義永睦子・鈴木正敏
福元真由美

DTP 内田幸子
清原一隆 (KIYO DESIGN)
伊藤琴美 (KIYO DESIGN)
丸山礼華 (KIYO DESIGN)
美研プリンティング株式会社

発行者 宇野文博
発行所 株式会社 同文書院
〒112-0002
東京都文京区小石川5-24-3
TEL (03)3812-7777
FAX (03)3812-7792
振替 00100-4-1316

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

©Yoshihiko Enosawa, Nobuko Kamigaichi et al., 2004
Printed in Japan ISBN978-4-8103-1496-0

●乱丁・落丁本はお取り替えいたします